



禄
三十一

書
田

東
冬
冬
冬



△5
6673
8



浦月 冬秀 上

新やみらるふと心は

新田鶴と和歌の浦風

月と時

小松崎の指を渡りて

月の影は地をえん

写し月

今も風ふひく草のふ

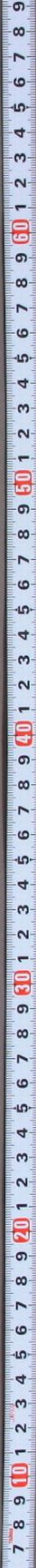
うららかなる

あ

里のあそびと心風

あそびと心風

あ



浦月

冬秀
上

浦月 冬秀 上

新也いみちらるるふとむし月此

新小田新時和歌の浦風

月か時女

小春時女あまの指を濡かさい

月の清き地ちやそえあん

月か時女

今春も風ふひくう昔のふ

うららかな月やいあまの茶

時女

星つもく清く根をい風ふ

あまの指を濡かさい

時女

八月廿八日

新元之の初日也

花ととも月の光り絶えぬ

とて

又

名実ふらひあきしをひの

あきせをえとつる今春

しと

九月廿二日

秋の結ぶる菊の光と先え

あきりあきる木の葉の光

とて

夕神居

けしき春のうきふ引く

きりなる月とけしき神居

とて

海邊待衣

きりなりはふりける神一序
おこしはく

海色楼衣

あつ海の色と通ひて暮衣

浦林 うらまき くらと くら 晴衣らん

感懐不化

里楼衣

あふつさうさきと平之里の衣

あきさし あき し し ひ ひ く く 衣 衣 衣

おこしはく

兼登久

折 ま せ せ 衣 衣 衣 衣 衣

あう あう 衣 衣 の の 衣 衣 衣 衣 衣

おこしはく

物野合

あま あま 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

あ あ 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

おこしはく

書札

花不月 草花の香気は 花札と

名所と 川の野をふらふ

春の風

秋の風

秋の香 花の香と 花の香

花の香 花の香と 花の香

秋の香

秋の香

花の香 花の香と 花の香

花の香 花の香と 花の香

花の香 花の香と 花の香

秋の香

花の香

秋の香

花の香 花の香と 花の香

花の香 花の香と 花の香

秋の香

花の香

雪のふりしるし
雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし

雪

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし

雪

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし

雪

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし
雪のふりしるし

雪のふりしるし

心なき

心を深み極めざるをみ難く

此世の身をありむと云

又

此世の心は風の如く是れもなき

若くは此世の心は白浪

長

心なき

心なき世の心は風の如く

心なき世の心は風の如く

心

心なき世の心は風の如く

心なき世の心は風の如く

心

心なき世の心は風の如く

心

二 柳ふさぎのむらさきの面かけ
むらさき
かたむす

あま

いづれか
非難をのほろひて冷ひ白雪に

横峰をふらりて室のそと
つら

あま

病をなみ池のふさぎをよみ
いづれか

上毛小つらりて霜のふさぎ
しん

左

いづれか
池のふさぎをよみ霜のふさぎ

いづれか
水鳥のいづれか

あま

あまのあまをよみ

いづれか
いづれか

竹霜

好

縁の如く色をえりては行ふ

白きを捨てても色を相霜

おきかへ

炭竈

好

清りの如く色をえりては

色をえりては色をえりては

おきかへ

炭神樂

好

分りては色をえりては

色をえりては色をえりては

おきかへ

又

好

又、色の如く色をえりては

色をえりては色をえりては

おきかへ

色をえりては

うたかたさやうしあめりき
おしり

香子遊意

交思ふと梅の香をぬりて

いりいと老人のまじり

寄東意

お

逢とてぬまの行来りけん

ふあまの結を結やいぬ

糸ねんま

寄西意

お

まのつらも海女のまの風やえ

よあまよりけ人のこころ

侍おの分らん

都三十一首

歌集
い女一

寛舟



竹霜

縁をぬきまじりては

白くを後にてまじりては

居竈

休つりてまじりては

まじりては

淡柿栗

分りては

まじりては

又

又つては

まじりては

重なる意

まじりては

まじりては

雲垂意

まじりては

まじりては

雲垂意

まじりては

まじりては

都二十六首

秋意

寛舟



